

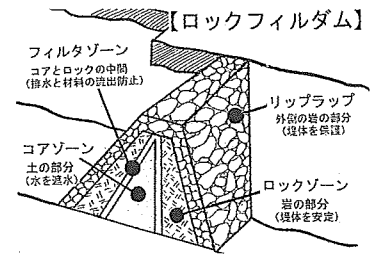
心の目

連載エッセイ ②46 札幌かに本家社長 日置 達郎

『愛知用水の歴史』④

世界銀行からの十七億円の融資については、五年という短い完成期間や海外からの技術指導を受けるといふ条件付きでの認可となりましたが、いずれにしても、昭和三十三年十一月に木曾王滝村で、牧尾ダムの記事がいよいよスタートしました。

牧尾ダムは、基礎岩盤の硬さの条件を比較的選擇はない方法と言われている。「ロックフィルダム」の形式をとっています。その名の通り、水を遮る壁を作り、その両側を名前の通り岩（ロック）で満たす



（フィル）ダムです。

ちなみに、エジプト・ナイル川の氾濫防止と灌漑用水の確保を目的に作られた「アスワン・ハイダム」も、高さ一一一メートル、全長三六〇〇m、総貯水容量世界第三位を誇る代表的な巨大ロックフィルダムです。ちなみにダムは、使用する材料により、大きく「コンクリートダム」と「ロックフィルダム」の二つに分類されます。さらに基礎地盤の強さや地形、地質、経済性、施工性などからさらに細かく分類されます。

さて、牧尾ダムの建設ですが、条件となつてくる工期を守るため様々な取り組みがなされました。

①幹線水路を十七の区分に分け全区間同時進行での工事を進める。

②大量の夜間照明機を用意して一日あたりの作業時間を大幅に延長する。など、多くの人の努力により工事は着々と進められました。日本の技術者の努力はもちろんです。米国から派遣された優秀な技術者の協力と、輸入された最新の大型機械の活躍も大きく後押ししました。とりわけ米国の技術者の作業基準はとて厳しく、例えばセメントの原材料などわずかでも規格外のもの、一切使用しなかつたとのこと。

日本のものづくりの精神と技術は、現在世界から非常に高い評価と実績を得ていますが、当時はむしろ日本の技術者の方が、米国の技術者の姿勢に大いに影響を受けたといえます。いずれにしても、プロとしての誇りと意識の高さが刺激となり、お互いの姿勢と工事の品質を高めていったのは間違いありません。

小生も社員研修の席などで、よく「ピラミッドを補修する三人の石工」の話

します。仕事の理由を尋ねると、一人目は「自分が食べていくために…」と答え、二人目は「家族を養うために…」と答え、三人目は「ピラミッドを見に来て下さる人達に喜んでもらうために…」と答えたとのこと。自分が何を糧に仕事をしていくかで、そこに感じる充実感や取り組み意欲・姿勢は大きく違って来るはず。大きな志や目的は、困難な作業に対して限りない勇気と不屈の闘志を与えてくれます。水不足に悩む人々を、このダムを作ることです。なんとか救っていきたいという思いは、まさに三人目の石工の言葉に通じるものなのです。

（次号に続く）



著者プロフィール

昭和10年、三重県津市美杉町出身
札幌かに本家チエーン代表取締役
店舗設計や庭造りが趣味。
日本飲食産業協会副会長
名古屋まつり・英傑行列
第十代徳川家康役

平成28年7月1日発行
月刊「なごやが」
7月号 掲載